

「新版・呑川は流れる」の目指すべき内容について

1) (事例1) 呑川に掛かる「橋」について

既刊の「呑川は流れる」「呑川は流れる 2004」を通して、不十分だったり、抜けている点は、とりわけ充実化を図る必要があります。

その例として「橋」があります。「人間」にとって、「川」を利用するために一番必要で、日常的に利用する施設に「橋」があります。

この「橋」については、「橋と名所一覧」で「橋の写真」を載せようと意見が出ました。

しかし、単に「上流側から撮る」とかいう形式的な写真では、その橋の「特徴」や、その橋をめぐる文化や周囲の状況をあぶり出すことは出来ません。



ここは、手前にひらがなの文字が見えるように「やなぎぼし」です。昔、「河畔林」には「ヤナギ」が良く植えられ、土手を守る大切な樹木だったので。

「柳橋」を撮影する時、この「ヤナギ」も写るように撮ることが大切になります。



ここは「雪谷小学校」の近くにある「西の橋」です。橋自体はアルミ製の欄干で、先に紹介した「柳橋」とほとんど同じです。

しかし、この「西の橋」を通る道路の先は、かなりの傾斜の「坂道」になっています。

「呑川」が創り上げた「溪谷」の特徴が浮き彫りになっていますが、この「坂道」は、有名な「雪見坂」なのです。

この「雪見坂」を登り切ると、「富士山」の頂に積もる「雪」が見えたので、「雪見坂」という名前が付いたそうです。そして「雪が谷」の「雪」もそれ由来であり、「谷」はもちろん「呑川」由来です。

「柳橋」と「西の橋」はまったく同じような形式の橋なので、それを見ても、人々は特に関心を抱かないと思います。しかし、その特徴を表現した「写真」と「説明」があると、人々は初めて興味を持つのだらうと思います。



同じく、まったく同じ形式の橋が続きますが、「居村橋」のたもとは「昭和初期住宅」があります。現在は、ほとんどモルタル壁が多い街並みの中で、「昭和」を知る貴重な風景です。



さて、橋の「周りの風景」だけで無く、「橋」そのものや、

「橋の構造」にも目を向けてみましょう。

ここは「八幡橋」（久が原）です。この橋の「親柱」は年季が入っていて、しかも重厚な「浮き彫り銅版」の橋名版が付いています。まるで「お江戸日本橋」のような風格です。

いかにも「銅版」らしく、酸性雨で銅の緑青（ろくしょう）が出て、親柱にも染み出て、風格をなしています。

しかし、この立派な「親柱」は、本当に「親柱」なのでしょうか・・・



実は、この通り「親柱」では無いのです。

「親柱」は、橋の「欄干」や、フェンスを支えているものを言います。

この場所では、「欄干」は親柱のように見える「石柱」につながっていないのです。



「八幡橋」の隣の「仲之橋」を見てみましょう。

「架替え」した新しい橋らしく、立派な大理石風親柱に、真鍮の「橋名版」が付いています。

しかし、ここでも「石柱」は「親柱」では無く、このフェンスの「親柱」は、フェンスの細い丸棒の隣りにある、

金属の角柱が、「護岸」にボルト止めされ、「親柱」の役割を果たして、フェンスを支えているのです。

しかし、「橋の構造」に良く注意して見ていくと、こういう橋ばかりではありません。



ここは「二国」の近く、池上の「松井病院」のたもとにある「久崎橋」です。

この「欄干」の丸棒は、その間隔が広く、幼い子どもたちが呑川に落ちてしまう可能性があり、後から「網フェンス」を取り付けて、「安全性」を向上させたのが特徴です。

でも、この角度から写真を撮ったのでは判らないことがあります。



同じ「久崎橋」を、別の角度から撮ると、橋の「欄干」はちゃんと「石柱」に取り付けられ、支えられています。まさにこの「石柱」こそが「親柱」と言えるものなのです。

こういうちゃんとした「親柱」は、この「久崎橋」から下流に向かって「鶴林橋」まで見る事が出来ます。

さて「橋の構造」を別の視点で見てください・・・



ここは西蒲田の「山野橋」です。この「橋の構造」の特徴は、中央が高まっている「太鼓橋」なのです。お年寄りにはやはり負担のようで、ヨイショヨイショと登るため、どうしても下を見て歩くようになります。



同じ「山野橋」ですが、こんどは自転車です。

坂なので、この女性は「立ちこぎ」をして登ったのですが、橋の途中では自転車から降りて、「片足こぎ」で進まなければなりません。

写真はただパチリと撮ればよいものでなく、その橋の特徴を如実に現すにはどういう表現が良いか、よく考えながら撮ると、面白く、深みのあるものになります。

ただ、それには時間が掛かったり、何回も来なければいけませんが、それは見ていただく方に判りやすいだけで無く、なによりも撮影者にとって、その橋への深い理解を得させてくれる「お返し」があり、うれしくなってくるのです。

さて、「橋の構造」については、さらに焦点を当てて見てみましょう・・・



ここは「長栄橋」ですが、呑川のほとんどの橋は、橋のところで盛り上がっています。お年寄の方が、買い物袋を持って、杖をついて、フウフウいいながら登る姿をよく見かけます。ここに写っている自転車の方は下り方向なので楽ですが、逆に、橋のそばに来ると「立ちこぎ」して乗り越える姿も見かけます。

これは、大雨時、水面を浮遊するゴミが「橋桁」に引っ掛かって、水の流れを阻害し、「洪水」を起こさないようにしているのです。つまり、橋の場所で少し盛り上げ、桁を高くしているのです。

しかし、「呑川」の橋を注意しながらよく見ると、全てがそうではありません。



ここは「一之橋」ですが、他の橋のような「盛り上がり」はまったくありません。平らなまんまです。

どうして、これでいいのか・・・ここをそのまま見る限り、何回見てもよく判りません。

でも、見る視点を変えると・・・



この「一之橋」の上には東急・池上線が走っているのです。

ずいぶん昔のことですが、私の子どもが赤ちゃんだった頃、夜中に高熱を出し、あわてて荏原病院の救急に連れて行ったことがあります。注射を打ってもらってのその帰り、「一之橋」のこの場所を通ると、巨大なクレーン車のような特殊作業車が止まり、点検作業をしていました。

電車が走っていない、夜中の時間でこそ出来る作業があるようです。

その時、ガードに、ギリギリに接触しそうな巨大な作業車に驚き聞いてみると、保線作業が出来る決まった高さが、キチンと確保されているのだそうです。

子どもは強い注射のせいでしょうか、すぐぐっすり眠って、安心して帰ったのを覚えています。

つまり、この場所では「橋」だからといって、盛り上げることは出来ないのです。

特殊作業車が通れて、作業が出来る高さが確保される必要があるのです。

しかし、だからといって、橋の盛り上げが無いと、「洪水対策」はどうなるのでしょうか？

それが気になって、大雨の日にここに出掛け、その仕掛けに気が付いたのは、ずいぶん後になってからでした・・・

「新版・呑川は流れる」を魅力あふれるものにするために、その内容を豊かにすることは特に重要です。

「橋」で言えば、ただ「橋の名前」を羅列し、河口からの距離を示しただけでは、多くの方は興味が湧かないでしょう。そこに、実際に足で歩いて、橋の特徴を判りやすく表現することにより、自分の近くにある「橋」がとても身近に感じられ、「ああ、そうなんだ・・・」「気が付かなかった・・・」「これは面白い・・・」と興味をいだいてくださるのだと思います。

そして、それをきっかけに、自分の近くの「橋」だけでなく、呑川全体の「橋」を知ってみて、「橋とはどういうものなのか・・・」を知り、さらには「呑川」全体のことに関心を抱いていただくことになればと思います。

ただ、それには、ちょっと「橋」をのぞくだけでは、その魅力や特徴を探り当てることは出来ません。呑川全ての橋で、その特長を活かした写真を撮りきるまでには、2年や3年はすぐ掛かってしまいます。

ですから、橋以外の全ての分野でも、すぐに取りかかる必要があるのです。

その多くは、季節の移り変わりにも大きく影響します。

石川台中学のそばに「一本橋」があり、ここは車が通れないので、安心して「川」を眺められ、「桜」も見ることが出来ます。



ですから、桜の季節になると、近所の幼稚園や保育園の子どもたちが、先生に連れられて、入れ替わり、立ち替わりやって来ます。小さな子どもたちはワアワア、キャーキャーいいながら、それは楽しそうです。小さな子どもたちからすれば、自分に覆いかぶりそうな桜の花を眼前に見ると、ドキドキする興奮を覚えるようです。

車の通れない、安全な「一本橋」の魅力を伝えるために、桜の季節のこういう写真を撮ろうとすると、次は来年になってしまいます。季節性は「生きもの」に端的に現れますが、多くの分野で季節による変化は大きく、どんな分野でも全体像をつかもうとすると、2年や3年はすぐ掛かってしまうのです。

もちろん「新版・呑川は流れる」の、それぞれの項目を担当する方々の情熱的な取り組みは必要ですが、個人では限界があります。ですから、このメールを読んでいる多くの皆さんから、「ここには、こんなものが見られる」「昔、この付近は、こうだった」などの情報や、「こういうことを載せてもらったら、楽しい本になる」などの要望を寄せていただければと思います。

2) (事例2) 呑川の水質について

「呑川」の「水質」は、「悪臭問題」につながる大きな課題です。でも、「BOD が・・・」「DO が・・・」「硫化水素が・・・」などという言葉が出て来ると、多くの人は拒否反応を起こし、「水質」の項目は読み飛ばすことが多いと思います。

「水質改善」の対策においても、「高濃度酸素水発生装置」「合流改善」などという、聞き慣れない言葉が出てくると、イヤになってきたり、「もうどうでもいい・・・」という気持ちになると思います。

私自身も、「実際はどうなんだろう・・・？」と思うことがいくつもあります。

たとえば、呑川の「水質」の汚れの第一原因は「降り始めの雨に含まれる汚れ」なんだそうです。

つまり、降り始めの雨には、家屋の屋根の汚れや、道路の汚れなどが洗い流されるため、この時に一番汚れのひどい水が「呑川」に流れ込むそうです（・・・と、行政は言っています）。

しかし、たくさんの雨が降って、「下水管」に収容しきれなくなった水は、「越流水」として川に流れ込みます。

「下水管」には「家庭排水」が流れているわけですから、初期の雨が終わったあとは、道路の汚れは入って来なくなっても、トイレの汚物や、洗濯機の排水、味噌汁などの台所汚れなどが、川に入ってくるような気がします。

こういう疑問が起きた時、私はまず呑川の現場に立ちます。



たしかに、「下水吐出口」から流れ込む、雨の降り始めの「越流水」は、汚く汚れています。この時の悪臭もひどいものです。

しかし、しばらくすると・・・



ここは同じ「下水吐出孔」ですが、とてもきれいな水に変わります。
これが「下水管」の中を流れている水？・・・」と思うほど、透き通るような透明度の高さです。

これにはビックリしました。

「越流水」が出る時は、「下水管」を流れるかなり汚い水が呑川に入って来ると思ったのですが、それは雨の降り始めの初期だけだったのです。

現在、呑川沿いでは全ての「下水吐出孔」に、「濾過スクリーン」や「スワール」「水面制御」などの装置が取り付けられ、汚い水が流入しないように制御されています。

その効果を、目の前で確認出来たのです。

(私が、下水の越流に関心を持ち、観察するようになったのは、10年以上前からですが、その時はこんなきれいな水が吐出する事はありませんでした。)

つまり、このことは、「初期雨量を流入させない」ことだけで、呑川の水質を汚さないで済むことを示しています。

現在、行政は、下水の「貯留管・貯留池」を作り、初期雨量をそこにため込んで「呑川」に流入させない手法を考えていますが、それは効果的だと思います。

そして、その「貯留装置」の場所を確保するのは、財政的問題も含めて困難であることを見越して、「高速ろ過装置」の実験的設置を検討しています。これは、雨天時に呑川に越流させるのは仕方ないにせよ、雨天初期の汚水をきれいにして流入させるものです。

私は、下水吐出口の越流観察から、「降り始めの汚れ」と、「その後のきれいな水」を目の前で見て、いずれの手法も効果が期待出来ると感じました。

呑川の「水質」や「悪臭」問題は、化学的にはむづかしい説明を要しますが、そういう説明よりも、「現場で観察した結果」や、「みんなが川を見て確認出来る内容」で、判りやすい説明がとりわけ重要だと思っています。

そうでないと、「呑川」にとって重要な「水質」問題が、「やっかいで難しいので、読まない」と言うのでは、とても残念だからです。もちろん、化学的な説明やデータも重要ですから、それは特別に興味のある方に、「新版・呑川は流れる」の後半に「資料編」として載せて、勉強していただければと思います。

ただ、呑川の「水質」の諸問題を、化学的な理屈で説明するのはむしろ簡単ですが、それを現場に現れる、つまり観測出来る内容で説明するのは大変です。

たとえば、降り始めの汚れの越流を見たり、撮影したりするのは、そう簡単ではありません。
傘を差しながらの撮影であるということよりも、「汚れの越流」は、わずか5分とか、せいぜい10分位とかのきわめて短い時間なのです。それを過ぎれば、「きれいな水」に変わるのです。

「呑川」に見に行ったら、越流していない、後で見に行ったら、すでにきれいな水に変わっていた・・・などという事はザラです。

たった1枚の「汚れた水」の写真も、「きれいな水」の写真も、そう簡単には撮れないのです。

私の場合は、今日の雨はかなり降りそうだと思ったら、越流する前から張り付いて、「汚れた水」が吐出するのを待ちます。もちろん、待ったからと言って「越流」するとは限りませんが・・・

また、たくさんの「下水吐出口」は、それぞれ越流の仕方が違って、一つの吐出口の様子だけで、全体を判断することは出来ません。なるべく多くの「吐出口」の様子を把握しようと思うのですが、なかなか大変で、うまく撮影出来ていません。

また、「越流水の水質」を観測することは重要であっても、行政にそれを強要することは、私には出来ません。行政の方が、見られるか見られないか判らない状態で、時間を取って現場に行くことは、負担が大きすぎます。たとえ遠隔観測「カメラ」で「今、越流した」と知っても、現場に着いた時には、もう「汚れの越流」は終わっていて、水質測定「採水」など出来ないことが、自分の経験からよく判るからです。

ただ、そういうことを身を持って判るためにも、雨の現場にしばしば出掛けることは重要だと思います。ですから、「越流水」だけでなく、呑川の「水質」全般を判りやすい形で、状況を把握したり、撮影するのには、これまた他のテーマと同様、2年や、3年は掛かるのです。

「新版・呑川は流れる」の内容をいかに充実させ、親しみ易く、判りやすいものにするか・・・

「とても面白い、興味深い本が出来ましたね」と言われる本が
できあがるか・・・

「大田区の郷土を知る上でも、手放せない本になりましたね」と
言ってもらえるか・・・

そういう本になるために、私たちは情熱を傾けて取り組まなければならないと思います。
そしてそれが、私たちの世代が孫子の代に贈る最大のプレゼントです。

「定例会」では、写真を見せたり、具体的な事例まで挙げて論議が出来ないので、内容にまで踏み込んだ討論が出来ません。
本来なら、この10倍も、20倍ものたくさんの具体例を挙げて、内容を深めたいのですが、長くなりましたので、今回はこれで論議の参考とさせていただきます。

高橋 光夫
